

『ルース』における恋愛と偽装

—ハーディの『ダーバヴィル家のテス』を補助線として—

鈴江 璋子

『テス』との補完関係

小説『ルース』を恋愛小説——しかしいわゆる純愛物語とは別の観点から書かれ、別の様相を備えた、ロマンティックな恋愛小説の定型を破る、愛と性の物語として読んでみたい。提示される諸問題を考察するとき、女性という、掟を定める側にはない者から見た愛と性の物語が立ち現われる。それは「求める男と待つ女」「強い男と従う女」というような近代恋愛小説の固定観念とは別文脈の、いわば「求める女と応じない男」という組み合わせのなかで、既成道德の律法の網を掻い潜って、女性が自己の感性を信じ通すという、成長物語とも冒険物語とも呼べる物語である。

考察を明確にするために、ハーディの『ダーバヴィル家のテス』を一種の補助線として用いたい。この二つの小説は執筆の時代も、背景も、文学上の主張も、ストーリー展開も異なり、相似というよりは相違が際立つのだが、同時に奇妙に相互補完的關係にもある。19世紀末自然主義の時代に、男性の視座から書かれた『テス』が、その38年前のヴィクトリア朝中期に書かれた『ルース』が明言できなかった思念をはっきり前面に出してくれる場合が多いのだが、『ルース』が『テス』の先回りをしている局面もある。フェリシア・ボナパルトは『ルース』を論じて、ギaskellがルースを罪ある女と見ていないこと、そのイノセンスを花や植物を用いて提示して、植物の女神ペルセポネーを暗示する手法を取っていることにおいて、ギaskellは「考え方においても方法においても、トマス・ハーディに先んじている」と述べる。ギaskellは神話を作品中に使用するのではなくて、作品を神話詩的に形造るのだという注目すべき立論の後、さらに“Even more important here than the narrative perspective is the perspective in which Gaskell allows Ruth to see herself. Hardy—it is part of his irony—shows us that Tess, completely trapped in the perspective of her society, never exonerates herself.”(Bonaparte 89)と指摘し、テ

スが社会通念から自己を解放できないのに対してルースは自己を断罪せず「内面の自己を、自分が感じる通りに見ている」と分析するが、「罪」に関する感覚ばかりでなく、男女の問題において、ギヤスケルがむしろ現代に近いように感じられる。それは『テス』が恋愛小説の定石を踏んで、厳然と存在する社会の掟に対して生身の〈純粋な女〉が、激しく、愚直に立ち向かい、定められた道を駆け下るといふ悲劇であるのに対して『ルース』が〈弱くて無責任な男と世評に敏感な女〉という、近代恋愛小説の定型にはないが現実には存在する組み合わせを、絶対的な道徳律ではなく、世評という相対的評価で罪も許しも揺れ動く精神風土を背景に描くからであろう。

『ルース』は〈純潔でない〉純真な女が、偽装を凝らして自己を隠蔽しつつ人生を積み上げ、満足を得て終わるといふ、苦い〈成功物語〉である。男を信じることができず、愛を隠蔽した女の成功物語『ルース』は、男を信じ、愛に殉じた女の悲劇『テス』への辛口批評になっていると言えよう。

テスは人の噂を逃れるためにはこの土地を離れて、どこか遠くへ行かなければならないと思う。「一旦失われたものは永遠に戻らない、というのは、身持ちにおいても真実なのだろうか？ 彼女はしばしば自問した。過去をベールでおおうことができたなら、それがいわれの無い言い草であることを自ら証明することもできる」(Hardy 99)。過去に受けた傷を隠蔽したいと願いつつ、テスは徹底して誠実に生身の自分自身をさらす。彼女は夫と頼む人が〈真実の自分〉を見ないのを知って驚愕する。「この私自身」を見て！と彼女は願う。

“I thought, Angel, that you loved me—me, my very self! If it is I you do love, O how can it be that you look and speak so? It frightens me! Having begun to love you, I love you for ever—in all changes, in all disgraces, because you are yourself.” (Hardy 293)

〈純潔〉とかく汚辱とかいふベールをかぶせたのはエンジェル・クレア自身であるのに、テスを清純な女の仮面をかぶった罪深い女であるように咎めることに、テスは恐怖を感じる。一方『ルース』においては、善意の人によって、ルースは実際に誰も彼女のことを知らない遠くに運ばれ、偽装・偽名を勧められ、これに従うことによって、性の過ちを犯した少女ルース・ヒルトンという自己を偽り、

行い正しい不運な未亡人ミセス・デンビーの姿を取って生きていくのである。変名はまた、男性主人公ヘンリー・ベリンガムにおいても、資産継承の便宜のために行われている。こうしてギヤスケルは、社会そのものの持つ変名性と欺瞞性をあぶり出し「規範」と世間が信じるものの脆弱さを示唆するのである。

作中にドーチェスターの野や森が重く実在する『テス』に対して、お針子ルースが暮らす町は、それ自体、急拵えの仮面をかぶっている。産業革命の波に乗って、その都市自体が貴族文化から新興市民文化への変貌をとげつつあるのだ。冒頭、かなりの紙幅を費やして、ギヤスケルは通りに面して立ち並ぶ店舗や歯科医院や、小奇麗な住宅が、実はかつては壮麗であった貴族の邸宅の正面ファサードを剥ぎ取り、細かく分割して、便利なように改造したものであり、一步中に入ると、彫刻を施した立派な階段があったり、ステンドグラスに昔の貴族の名が書き連ねてあったりするのだと明かしている。そのような廃邸ヘニッジ屋敷の、咲き乱れる美しい花の絵が壁に残されたままの偽装空間を仕事場として、ルースたちお針子は、深夜まで過酷な労働を強いられていたのである。

『ルース』の原型とも考えられる短編「リビー・マーシュの三つの祭日」において、女主人公のお針子リビー・マーシュは、単身、徒歩で引越してくる。荷物は木箱一つだけという身軽さだ。生まれ育ちや親兄弟などの説明は一切ない。引っ越しといえば普通、たんす、食器戸棚、ベッドなどを荷馬車いっぱい積んでやってくるものだが、リビーは何も持たない。荷物も、地縁も血縁もない<他者>、いわば都市の放浪者であるリビーが、次第にその地域に受容され、役に立つと認められて、安定した人間関係の中に入るという素朴なストーリーにおいて、際立つのはヒロインの身軽さと孤独である。

ギヤスケルの女主人公を特徴づける孤児性は、ハーディの『テス』とは好対照をなす。テス・ダービフィールドは「家」という重荷を、観念としても事実としても、背負っている。観念としては、中世以来の名門「ダーバヴィル家」の後裔という重荷であり、遺伝的にもダーバヴィルの顔立ちを持っている。事実としては、貧乏で怠惰で夢想家の父と、無能な母、沢山の弟妹という重荷を負う。家族は稼ぎ手のテスに凭れかかって離れない。結婚式直後に夫エンジェル・クレアに去られながらその不在に耐え、呼びかけが来る日を信じて、農場の激しい労働に耐えてきた彼女を最終的に追い詰めるのは、あの引越し荷馬車の場面である。

父親の死によって三代地主としての居住権を失ったテスの一家は住居を追われ、運送馬車に食器戸棚、寝具から鍋釜一切、通例通り大時計までを山のように積み込み、子供たちに母親まで、乗り込んでいる。荷馬車は越越し先が決まらぬまま、由緒あるダーバヴィル家の墓所のあたりで立往生するのだが、ここでテスの頑張りの糸が切れる。自分ひとりなら野宿もいとわぬが、親、弟妹を野曝しにはできない。テスが担う荷の重さは、イギリスの農村で生活するという重さである。荷馬車に山積みされた荷物によって視覚的にも十分に説明されるこの重荷のために彼女はついに宿敵アレック・ダーバヴィルの手に再び落ちるのだが、夫エンジェル・クレアへの愛と信頼は深く心のうちにあって、揺らぐことはない。

『ラプンツェル』や『プシュケー』など説話世界の純愛物語の定石として、最初の運命的な出会いをした男女は、その後さまざまな試練に遭う。仲を割かれて互いに行方が分らなくなる場合がある。別の姿に変えられる場合があり、互いを裏切る場合もある。誤解、不信、誘惑、汚辱など、試練は残酷である。しかし男は試練に耐え、自我を抑え、仮の姿の奥にある真実を見抜き、愛を貫いて、自分が<王子>であることを証明する。女は男によって<荒野>に連れ出され、さまざまな苦難を経験する。しかし彼女は試練に耐えて男を愛し、信じ、待ち続ける。二人は再会し、めでたく愛が完成する。

近代恋愛小説の古典ともいえるハーディの『テス』も、このような純愛物語の定石を踏まえている。村祭りの夕べ、旅の青年エンジェル・クレアが見かけたのは、白い踊りの衣装に身を包んだ清純な村娘テスだった。酪農場で再会した時、彼の目にテスは、感性豊かで一点の汚れもない大地女神の化身かと映った。だが結婚の誓約の後で、彼女が処女ではなくて、性暴力に汚された経産婦であると知る。彼はテスをも、テスの純潔を信じ切っていた自己をも、許すことができない。クレアがついに頑なな自我を超克してテスのもとに帰った時——それはあまりにも遅すぎる帰還であったが——テスの愛はむしろ純粋に研ぎ澄まされていた。

通常の冒険譚同様、純愛物語においても探検者は男性であり、困難と闘い、初心を貫いて、本来の彼女のもとに帰るのが筋である。これは処女崇拜と関連があるのであろう。二人目の女性、あるいは三人目の女性と愛を築き直すというように筋が発展しては、純愛物語にならない。他方女性は重なる試練に耐えて、去った男を待つのが基本であり、彼への愛と信頼が揺らぐことはない。これはおそら

く物語が男性の視座から書かれているからであろう。女性が最初の男に見切りをつけて、第二、第三の男性、あるいは<本当の王子様>を探しに行くというストーリーは、悪女物語、あるいはなにか他の——女性による冒険物語あるいは成長物語になるのではあるまいか。

『ルース』においても女主人公は身軽である。リビー・マーシュと同様に、お針子のルースは、ほとんど所有するものを持たない。自作農の娘として育てているが、相次いで両親を失い、財産もなく、重荷もない。身元引受人にも見捨てられて、都市の片隅の婦人服縫製店で貧しい見習い奉公をしている。孤児としてひとり空間に佇む少女ルース・ヒルトンは、探検者の資格を十分に備えている。上流階級の富裕な青年ヘンリー・ベリングムの遊び心を誘うのも、この身軽さが理由の一つであろう。舞踏会という偽装空間で、ベリングムから誰かが置き忘れた白椿の花を与えられたルースは、ある日曜の午後、彼に、彼女が生まれ育ったミラム屋敷に連れて行ってもらう。ここで偶然縫製店の女主人に見つかり、素行不良をなじられて、その場で解雇されるのだが、このときルースは小銭さえ持っていなかった。好機を逃さず、ベリングムは彼女を馬車に乗せて、ロンドンへ向かう。ルースはこのとき処女を失うことになるのだが、これまで清潔に育ってきた彼女には、このような事態について、危機感がなかった。

多くの男性作家はかなり力を入れてヒロインの処女喪失の委細を書く。『テス』において、場面は深々たる夜の御猟場の森である。アレック・ダーバヴィル自身も、意図してここに彼女を連れ込んだわけではない。彼も自分がどこにいるか見当がつかない「森の中の子供」になっていたのだ。語り手は、なぜこのように粗野な者が美しい者を汚すのか、と嘆き「測り知れない、社会の深い裂け目がひとつ口を開いて、この後のわが女主人公の性格と、トラントリッジで運を試すために母親の家を後にした、あの以前の彼女とを分かつことになった」(91)と語る。

一方、ルースがベリングムに連れ去られるのは、夕方とはいえまだ人目がある時間であり、場所でもあった。自分の馬車を取ってくるから待っているようにと言われたルースは、パーラーで出されたお茶を飲みながら、じいやのいる昔の家に行くのが良いのだろうな、と思案している。彼女の運命を予見した人はいたのだが、警告してくれる人はいなかった。上流階級で、金払いの良さそうなベリングムに遠慮してのことである。ギャスケルは簡単に解説する。「生まれつき従順で、

ひとのいいなりになるルースには、他人の希望に楯突くことなどできなかった。何の疑いも抱かず、危険が待ち受けているなどとは全く気づかなかったのである。彼女は馬車に乗り込み、ロンドンに向かって出発した」(Ruth 47)。

忍ぶ恋か改悛物語か

その後ルースがどのような経験をしたか、ギヤスケルは書かない。ルース自身さえ、特に思い出すこともない。だが、その後ほぼ1年の間、二人は甘い生活を楽しんだのだろう。そして次の年の夏、17歳になったルースは、ベリンガムに連れられて北ウェールズに避暑に来る。そこで運命が急転する。周囲の厳しい目にさらされて、ルースは初めて、自分たちが世間に認められる正当な婚姻関係がないこと、自分が<ふしだら女>と見られていることを知り、愕然とする。だが、これを知ったらベリンガムもルースのために嘆くだろうと考え、苦しい自己を偽って、彼の求める「かわいいおばかちゃん」であり続けようと努める。‘Would you be so kind as to teach me one of those games at cards you were speaking about yesterday, sir? I would do my best to learn.’(Ruth 57)のようにsirを使って丁寧に話しかけている。実はベリンガムには、ルースの身が立つようになどという配慮は一切なかった上に、遊び相手としても少々退屈と考えていたのだったが。ルースもきちんとした関係にしてほしいという要求は持ち出さない。ただ、ベリンガムが池に咲くスイレンを彼女の髪に飾ってルースの美しさに感嘆した時、ルースは自分でも池に映った自分の姿を美しいと思い、ベリンガムがこの美しさに満足したことを喜び、二人の気持ちが完全に一致したこと、二人の審美感覚が共通であることを、幸せに感じたのだった。だがこの直後、唐突に二人の関係は終わる。ベリンガムが高熱を発して意識不明に陥ったのだ。ベリンガムの母親が呼ばれ、事態の收拾は彼女の手委ねられる。

ベリンガムは意識を回復するが、面倒を避け、一切を母親に委ねて、ウェールズを去る。置き去りにされ、自殺も考えたルースは、高潔なベンソン牧師に救われ、彼の住むエクルストンに引き取られる。郵便馬車の吹きさらしの屋上席に座っての旅である。だがそのとき彼女は身重になっていたのだ。ベンソン牧師と、その姉フェイスの示唆で、ルースは身分を若い船医の未亡人ミセス・デンビーと偽り、出産と育児という経験に立ち向かうことになる。

相場通りの 50 ポンドという手切れ金を与えられて、無情に捨て去られた後も、ルースはベリングガムを愛し信じ続けているのだろうか。もちろん、そうでなければ恋愛物語は成り立たない。女は男を信じて待たねばならない。ルースは自分が捨てられたとき、ベリングガムが病気で無意識状態だったことを知っている。彼女はベリングガムを看護したかったのだが、阻まれた。寝顔を一目見たかったのだが、許されなかった。あの無情さはすべて、ベリングガムの母の仕打ちであって、ヘンリー・ベリングガム本人は無情ではないのだと、彼女は信じる。だが読者は、ベリングガムが一切を母に任せて、面倒を避けてしまったことを知っている。彼女の弁護を多少はするものの、関係を継続する意思はない。まして結婚などは全く考えていない。しかし恋愛物語においては、結婚という法的に正しい手段を取ることこそが男の誠意の見せどころであり、愛の永遠を証明するものであり、周囲の承認と祝福を得る大団円であって、女性はそこにおいてのみ、安心して性愛に身を委ね、子供を産むことができるのである。ことにヴィクトリア朝において、男女が合法的に、周囲の祝福を受けて結ばれるのは結婚以外になかった。愛した女性と結婚しない男は<王子>ではない。

ルースはベリングガムを愛し、信じ続ける。だがそれでは、彼の正体を知らされている読者に、ルースが愚かに見えてしまう。聡明で、周囲の空気を察するのが早いルースは、当然男の正体を悟り、過去の過失を後悔するべきである。そうではないなら、ベリングガムのほうが改俊してルースへの愛を再確認し、誠意を尽くして再会、そしてめでたい大団円へとストーリーを進め、自分が真の<王子>であることを示すのでなければならない。男が改俊する純愛物語か、女が改俊する成長物語か。ベンソン牧師は彼女が迷いを払って立ち直り、たとえ仮面のもとにであっても、周囲の社会の普通の一員として受け入れられ、成長していくことを期待している。周囲の期待に答えて、ルースは改俊物語のヒロインを演じなければならない。しかもそれを表面に現わしてはならない。<船医の未亡人ミセス・デンビー>はルース・ヒルトンが犯したような不始末を犯してはいない。彼女は若くして亡くなった夫を悼み、残された身の不運を嘆き、夫の形見である胎児を立派に産み落とせば十分なのだ。ミセス・デンビーには、改俊の必要は全くない。

一方ルース・ヒルトンは男に惑わされ、それが愛だと信じて性愛に誘われ、結婚という合法的な手段によらずに、私生児を宿した自分の無知を悔い、恥じてい

なければならぬ。その後、病気から回復したに違いないのに、連絡もしてくれないベリンガムを恨んでいなければならないし、そのような男を信じ、愛した自分を恥じなければならない。そうでなければ、心を尽くして彼女を救済し、よきキリスト教徒へと導いてくれているベンソン牧師に申し訳が立たない。彼女は手切れ金 50 ポンドを受取らず、返却したいと申し出て、プライドを示し、ベリンガムとの別れを自分にも、周囲にも、明確にする。愛において二人は対等の関係にあり、自分が弄ばれたのではないことを示したいのだ。もちろんこの気概は全くベリンガム家には通じていない上に、手切れ金が返されたという認識もされない。

長年ベンソン家に仕えてきた老女中サリーは「遠縁の若い未亡人ミセス・デンビー」という嘘を即座に見抜いて「ミセスだかミスだか」と言っている。彼女はベンソン姉弟の方便の嘘を信じるふりをする代償として、ルースをその嘘にふさわしい未亡人姿に仕立てあげる。彼女はルースの長く美しい栗色の髪を切り、未亡人帽をかぶせる。指にはすでにフェイスによって、この家の引出しに眠っていた、祖母の結婚指輪がはめられている。ルースはサリーが気抜けするほど従順に、未亡人の偽装を受け入れる。いいえ、私は若い未亡人ではありません、デンビーなんていう人は知りません、と彼女は言えない。咄嗟にルースの夫は若い surgeon だった、という作り話を案出したフェイスは **'he must have been something'** (113) と言うのだが、女性も、自分が何者かを証明しなければならないだろう。ベリンガムに去られた今、彼女は「ベリンガムの情婦」ですらない。職場を追われた今「お針子のルース」とは言えない。生家は廃屋となっていて「ミラム屋敷のルース」とも言えない。自己を何者とも証明できず、なぜ妊娠しているのか説明できないルースには、世間への自己証明としては<若い船医の未亡人ミセス・デンビー>という、ベンソン姉弟が考えてくれた偽装以外に頼るものはない。

賢いルースは周囲の期待に応じて悔い改め、ベリンガムへの思いを断ち切ったと見せている。だが出産を間近に控えたある日<ミセス・デンビー>あてに小包が届いた時、ルースは、ベリンガムからの小包かと胸をときめかせたのだった。周囲が、かわいそうな若い未亡人ミセス・デンビーが亡夫を思って泣いていると同情しているとき、ルースは、ベリンガムを思って泣いていたのだ。出産というなまなましい経験をしたとき、ルースは自分にこの子を授けたベリンガム、赤ん坊の父親のことを思わなかっただろうか。合法的な妊娠でないことを嘆き、生ま

れてくる子供に「私生児」の汚名を着せたくないと悩むとき、彼に対する恋情が、恨みとないまぜになっていないと言っては嘘になるだろう。ルースはテスのように憎むべき男の性暴力の犠牲になったのではない。好きな人から子供を授けられたのだ。妊娠を知らされたとき彼女は神に感謝して‘Oh my God, I thank thee! Oh! I will be so good!’ (88) と言って、フェイスを当惑させるのだが、むしろ結実しないセックスこそ戯れのセックスであり、受胎するセックスこそ真面目なものだ、この場合は結婚制度や性道德のダブル・スタンダードが問題であって、この妊娠は罪悪視されるべきでない、とギヤスケルは示唆する。

生まれたのは男の子だった。世に出るにあたって、男児にはことに父親の助力や指導が必要である。しかし、すやすやと眠る柔らかな赤ちゃんを傍らに置いて、ルースが見た夢は奇怪である。この無垢の赤ちゃんが急に大人の背丈になり、父親そっくりの顔つきをして、自分そっくりの処女を誘惑し、自殺よりひどい罪に陥れるのだ。その娘は放浪の果てに墮落するのだが、息子は出世して、裕福に暮らしている。しかも、その魂には血がべったりとついているのだ。その娘は彼にしがみついて、恐ろしい奈落へ引きずり込む。すると、そこから聞こえてきたのは、ベリンガムの悶え苦しむ叫びだった。若いころの悪行のために、自分は今、地獄の業火に焼かれていると、彼は大声で叫ぶ。

産褥にある女性は、ふだん抑圧しているリビドーを露わにするとされるのだが、これは実に奇怪な悪夢である。生まれたばかりの無心なわが子についてこれほどの悪夢を見る母親はめったにないだろう。男性のセックスに対する忌避感が際立つ悪夢であり、この夢に関する限りでは、ルースがひそかにベリンガムを愛しているとはとても考えられない。処罰感情の激しさが読み取られるばかりである。しかし逆に、ベリンガムの性的な引力からまだ逃れられずにいるとも考えられる。ルースの怖れは、この無垢の赤ちゃんに父親の邪悪な性的魔力が入っていることであり、彼女の分身はその魔力に犯されるのだ。彼女は、この悪が現れないように幼子を守り、理想的なクリスチャンとして育てよう、父親のような人間にしてはならないと強い責務を感じる。このようにしてベリンガム家の男たちは二代にわたって<寡婦>である強い母親に支配され、讚美される美しい息子となり、やがて自分の姓ではない姓を継ぐという、父権制に拠らぬ人生を生きることになるのである。以後ルースは生きる目的、愛のすべてを捧げる対象を得て、偽装がむ

しろ本来あるべき姿となり、外装に見合う実質を得ようと努力して、美しく上品で献身的な若い母ミセス・デンビーへと成長していく。この息子にふさわしい母でありたい、そのために、レナード出生の秘密は絶対に守らなければならない、さらに彼の父親が彼にふさわしい立派なく王子>であってほしいとルースは願うのである。

眠り王子ベリンガム

未婚の女性が妊娠するという事態は19世紀英国において、弁護のしようのない不始末であり、墮落であった。だが、母となったルースが確かにしたかったのは、ベリンガムがこの子の父親であるにふさわしい、立派な男であるということ、すくなくともそのとき、ベリンガムには真の愛が存在した、この子は二人の愛と誠実さの正当な結晶であって、恥ずべき要素はない、という点である。

子供、ことに男児はヴィクトリア朝父権社会において、家名の存続と発展、財産の継承に非常に大きな意味を持っていた。『テス』においてエンジェル・クレアは、テスと他の男との間に生まれて、やがて亡くなった乳児ではなくて、テスと自分との間に子供ができた場合を想定して悩む。二人の間に子供が生まれ、成長して母の不始末を聞かされたときの痛手をどう考えるか、と彼は言う。

正式に結婚した二人の間に生まれた正当な嫡出子が、母親が結婚する前の不始末にそのように悩まなければならないのか、とテスも驚き、完全には納得しないながらも、一緒には暮らせないというクレアの申し出を受け入れるのだが、クレアの潔癖症には性愛恐怖が混じっているようである。彼は言う。“How can we live together while that man lives?—he being your husband in nature, and not I. If he were dead it might be different...” (Hardy 310) 相手の男が活着しているのに、ぼくたちが一緒に暮らして行けるだろうか、君の肉体の夫は彼であって、ぼくではないのに、という言い方は妙に生々しく、テスの肉体を媒体にして、若い男二人が触れ合っているような感覚さえ与えられる。

母親となったルースは子供に恥じぬようにと教養を積み、上品な作法を知るミセス・デンビーという評価を得て、ブラドショー家の女家庭教師になっていた。周囲に対しても、読者に対しても、幼い息子レナードを慈しむ理想的な若い母の姿しか見せなかったルースなのだが、ダンと名を変えたベリンガムが姿を現した

とき、仮面の下に抑圧してきた、決して忘れることのできない恨みと恋慕が一気に噴出する。

‘He did me cruel harm. I can never again lift up my face in innocence. They think I have forgotten all, because I do not speak. Oh, darling love! am I talking against you?’ asked she, tenderly. ‘I am so torn and perplexed! You, who are the father of my child!’ (Ruth 201)

ベリンガムは「私の子供の父親」なのだ。彼女は恋しいベリンガムに愛されて子供を授かったことを子供に示したい。〈ふしだら〉ではなくて、正式な夫婦に劣らぬ愛があったことを確認して、名誉を回復したい。だが、それよりもまず、相変わらずハンサムで、魅力的な声のベリンガムを見ると、心の揺れを抑えることができないのだ。悪い男だと分っているのに、彼女はついに、‘Oh, my God! I do believe Leonard’s father is a bad man, and yet, oh! pitiful God, I love him; I cannot forget — I cannot!’ (202) と恋慕の叫びをあげてしまう。

一方のベリンガムもミセス・デンビーの正体がルースだと気づいて、よりを戻しにかかる。下院議員候補ミスター・ダンという仮面をかぶり、取巻きに囲まれている手前、彼もうかつには動けない。最初は柔らかに恋情を訴え、靡かぬと知ると彼女の正体を暴くぞと脅迫する。そして彼女の急所であるレナードのことを知ると「僕たちの子だね」と臆面もなく囁き、親権を行使するとまで仄めかす。

最初に一気に恋心を逆らせたルースだが、ベリンガムの攻撃が執拗になるにつれて、防御を固めてゆく。「ミスター・ダン」「ミセス・デンビー」という公人として動いている二人はいわば脇役に囲まれて舞台上で演技しているのであり、互いを客観的に見る機会も、自分を見せる機会もたつぷりあった。ルースは冷静にベリンガムを見、その怠惰ぶりに愛想が尽きた。女家庭教師としてブラドショーの家族に囲まれている彼女は、ベリンガムに二人きりになる機会を与えない。焦らされた彼はついに「ミセス・デンビー」との結婚を申し出る。美しく淑やかな、子連れのみ亡人ミセス・デンビーと結婚し、レナードはデンビー姓のまま、扱いは実子なみに、という案で、これによって哀れなルース・ヒルトンと、その汚辱は消える。彼自身の不行跡も、誰にも気づかれぬまま消えてしまう。〈ふしだら

女>の焼印を押された彼女の苦しみに全く気付かぬ虫の良い申し出をルースは一蹴する。あなたを愛したこともあったけれど、今は愛していない、子供と接触しないでほしい、あの子も、あなたのような人生を送るくらいなら、道路工夫になったほうがまだ、と彼女は言いきる。この愛想尽かして、恋愛物語は終わったように見える。

眠り姫は真の王子が現れるまで 100 年の間、眠った。目覚めて、真の王子を見出すのである。いま、男女の役割を入れ替えてみよう。ベリンガムは北ウエールズの宿で、高熱によって昏睡状態に陥り、魔女ならぬ実母の手に落ちた。それから 7 年、彼は親の属する上流社会の城のなかで暮らし、ダン姓となって財産を相続し、下院議員選挙にも勝った。世間的にはまずまずの成功を収めた半生と言えるだろう。だが彼は目覚めているのだろうか。何事にも無関心で、他人の話は聞き流し、信念も意欲もなく、周囲の設定のままに流されて歳月を経てきた彼は目覚めていたのだろうか。真の自己を眠らせているのではないだろうか。経験を積み、苦しみ、学び、人間の価値について目を開いて 24 歳になったルースが嫌ったのは、自省を知らず、他者の痛みを知らない<眠り王子>ベリンガムの鈍感さであった。もちろん世間も甘くはないので、病に倒れたとき、ベリンガムの傍に付いていたのは、もう 10 年も前、激流に馬を乗り入れて溺れるところを救ってやった少年一人だった。結婚の噂はあっても実現しないことを考えるとき、彼の生き方に真に共鳴する人はいなかったようである。恵まれない状況で懸命に生きる少女ルースと出会ったあの時期、社会の下層に生きる人々への目を開いたあの若い時期だけ、彼は本当に生きていたのではなかったろうか。

「ミスター・ダン」との出会いから数年後、この町をチフスが襲った。悪疫は急速に蔓延し、町中がパニック状態に陥ったとき、ルースは、隔離病棟の婦長として働くことを申し出た。このときまでに、ルースの若い頃の過失は明るみに出、貞淑な未亡人という偽装は剥がされていた。レナードが私生児であることが暴露され、ベンソン牧師姉弟が偽装に関与したことも明らかになって、一家は病原菌のように忌避されて苦しんだ。心情的にも、経済的にも窮迫したこの時期に、ルースは地域の医者 の 勧めで看護婦になり、心の籠った看護で評価を得て、社会に復帰したのだった。牧師一家も真情が理解されて、信頼を回復していた。

ルースは他者の痛みを知り、治癒力のあるその手を差し伸べる女性だった。彼

女のペルセポネー・イメージは確立しているわけではないが、冥界の女王でもあるペルセポネーが介護に携わるとなると、不気味な陰影が伴う。ともあれ、彼女の献身的な看護によって、猛威を振ったチフスも終息、主管牧師の感謝も受ける。だが、遊説に来た下院議員ミスター・ダンが罹患し、ホテルで臥せっているという話を聞いたとき、彼女は彼が何者であるかを明かし、看病をさせて欲しいと願う。今でも彼を愛しているのか、というデイヴィス医師の質問に、彼女は熱い涙を流して、譫妄状態の彼の傍にいたい、彼に気付かれなくていい、今はただ、傍にいたい(326)と頼む。

ここで『テス』の主人公エンジェル・クレアの、不可解な夢遊状態を思い出してみよう。テスの告白を聞き、どうしても受け入れられないと、階下のソファに寝たクレアだが、三日目の夜中に、突然夢遊状態で二階の寝室に入ってくる。これまでそのような症状を発したことがないクレアだが、寝ているテスを抱き上げ、昼に小難しい理屈を並べた本人とはとても思えぬ哀切さで「いとしい、大事な僕のテス！優しくて、善良で、誠実な」(316)と囁くのだ。この告白があればこそ、テスは辛い日々を頑張り通せたのだが、男の、鉄面皮ともいうべき自己防衛の外装を剥がして、内なる真情を聞くには、無意識の層を突くしかないのだ。『テス』より38年前に『ルース』はこれを試みている。世俗に狎れ、芯まで腐っているかに見えたベリングラムだが、高熱による譫妄状態から脱し、臉を開いたばかりのその目は、ルースを捕える。ルースは凝視に捕えられて、身動きできない。

But she did not speak; her looks were riveted on his softly-unclosing eyes, which met hers as they opened languidly. She could not stir or speak. She was held fast by that gaze of his, in which a faint recognition dawned, and grew to strength.

He murmured some words. They strained their sense to hear. He repeated them even lower than before; but this time they caught what he was saying.

‘Where are the water-lilies? Where are the lilies in her hair?’ (*Ruth* 329)

目覚めたばかりの彼は、北ウェールズでのあの運命の日、池に咲くスイレンを彼女の髪に飾って「美しい」と褒めたあの時のベリングラムに戻っていた。彼の心の奥にあの日のルースが存在していることを知った彼女は、満足して彼の傍らを

離れ、やがて人生からも離れる。レナードは約束通りデイヴィス医師の後継者として迎えられ、社会に安定した位置を持つことになるだろう。

眠り姫は目覚めて王子を見出し、華やかな結婚式を挙げるのがその役割なのだが、眠り王子ベリンガムも、目覚めたその一瞬でルースを捕え、意識下に眠っていた彼女への真情を明らかにしてルースを身籠らせた男としての役割を果たした。これまで長々と物語を紡いできた長編ロマンス作家エリザベス・ギヤスケルの、一瞬の早業である。もちろん眠り王子は目覚めてしまうと仕事がない。ベリンガムは病から回復するとまた、無感動な、惰性で生きている中年男に戻る。筋の展開に重要な箇所ですべて昏睡状態に陥るのが彼の役割である。正気に戻って言う言葉はたわごと、生きざまは迷夢なのだが、眠っているとき、彼は本来のイノセントな——少なくともニュートラルな——彼自身に戻る。ギヤスケルにおいて、眠っているというのはかなり重要な仕事である。ルースが悪夢に苦しむとき、赤ん坊のレナードは柔らかに母にすり寄って眠っている。『シルヴィアの恋人たち』において幼女ベラは、父フィリップが家を出るときも、世を去るときも、ぐっすり眠っている。その原型ともいえる「マンチェスターの結婚」においては、肢体不自由な少女エルシーは、実の父が11年の艱難の末に帰ってきて、初めて、しかも最後に、彼女を見たとき、眠っていた。ただ、誰か男の人が来たとき認識はしていたのだが。彼はその足でテムズ川に身を投げて死んでしまう。ただし、眠るという神秘的な役割は、乳幼児が受け持つのが普通で、成人男性が眠る仕事を果たすのは稀である。

女性が主人公となる冒険物語の場合、男性は主役として活躍できない。敵役として女性主人公を攻撃・虐待する「悪」の側では積極的な仕事ができるが「善」の側には、しどころがない。女性を保護、援助する助演は可能だが、ごく控えめでないと、女性主人公の勇気や孤独、可憐さが生きない。ボナパルトはベリンガムに『テス』のアレック・ダーバヴィルの要素を認め“Like Alec D’Urberville in *Tess*, he seems a restless, searching soul, bereft, in the world he has inherited, both of purpose and of meaning.”(Bonaparte 91) と述べているが、ベリンガムはアレックほどまめではない。姿を消したきり音沙汰がないところなど、むしろエンジェルに似ている。敵役アレックではなくて恋人エンジェルが彼の役どころであろう。ベリンガムはルースの恋人、その肉体の夫、そして彼女の子供の父

親という、セクシーで魅力ある二枚目の役割を果たすと同時に、彼女を誘惑し、墮落させ、妊娠させ、捨て去るという、色悪の敵役も演じるのである。現実には存在し、演劇の世界では説得力がありうる人物なのだが、小説という、筋を通す文学形式の中で造形することは困難である。捨てられた女の視座から書く場合には造形が可能なのだが、全知の書き手が女性を主人公として、彼女の側に立って書いた小説においては性格を確立し難い。善と悪という対立的かつ相互補完的な二要素を消化しきれない、外貌はハンサムで内容空疎なベリンガムは、昏睡してヒロインに看護を尽くしてもらうのが、恋人としての仕事なのである。

ハーディは『ルース』から学んだのであろうか。『テス』においては、エンジェル・クレアとアレック・ダーバヴィルという異質な二人の男性を登場させ、二枚目と敵役、善と悪とを振り分けて、この困難を解決している。しかし恋情と劣情、偽装と本心、拒むことと求めることは、決して対立する二項ではなく、むしろ瞬時に様相を変えながらひとりの人間の中に存在しているものなのであろう。

Works Cited

Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1992.

Gaskell, Elizabeth. *Ruth*. *The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol.6. Ed. d'Albertis, Deirdre. London: Pickering & Chatto, 2006. 巽豊彦訳『ルース』ギヤスケル全集第3巻、大阪教育図書、2001年。

Hardy, Thomas. *Tess of the D'Urbervilles*. London: Macmillan, 1967. 井出弘之訳『テス』ちくま文庫 2004年。

本稿は第22回日本ギヤスケル協会大会（2010年10月3日、於実践女子大学）における講演「ギヤスケル文学のトポス——廃屋のある風景」をもとにしたものである。日本語訳はエリザベス・ギヤスケル著、巽豊彦訳『ルース』、トマス・ハーディ著、井出弘之訳『テス』を参考にした。

(実践女子大学名誉教授)

Abstract

Ruth : Theme of Love and Disguise

Akiko SUZUE

In claiming guiltlessness of “fallen woman”, Gaskell, as Bonaparte pointed out, “anticipates Thomas Hardy both in purpose and in method.” Gaskell also anticipates Hardy in the use of unconscious psychology. Prior to Freud, Gaskell knew dream and delirium expose one’s inmost libido and hidden self.

In *Tess of the D’Urbervilles*, after hearing Tess’s confession of her past, Angel Clare refuses to take her as his bride. But in the midnight in his sleepwalking, he whispers “my dearest, darling Tess!” to disclose his love of her existing under his fixed idea of purity, guilt and reputation.

Thirty-eight years earlier than this, Gaskell effectively uses unconsciousness in *Ruth* to reveal man’s true love hidden under his ugly desire and mindlessness. Nearly at the close of the story, typhus fever sweeps over the country and seizes Bellingham. Ruth, an expert Matron at that time, wants to nurse him. Asked if she still loves him, she confesses that he is the father of her son. When Bellingham gets better and opens his eyes, his gaze holds her fast. He asks where the water lilies with which he adorned her hair are and proves his love and care for her exist under the layers of his egotism, bluff and snobbery. Bellingham has complex duality within him: he is to play the role of a romantic lover and immoral seducer, and the father of her illegitimate son.

Ruth, the victimized heroine, has to spare the shame of “fallen woman” by taking pseudonym of Mrs. Denbigh and the disguise of a widow of a surgeon by wearing black gown, widow hat and old ring. She hides her love-hate attachment for Bellingham under the religious repentance.